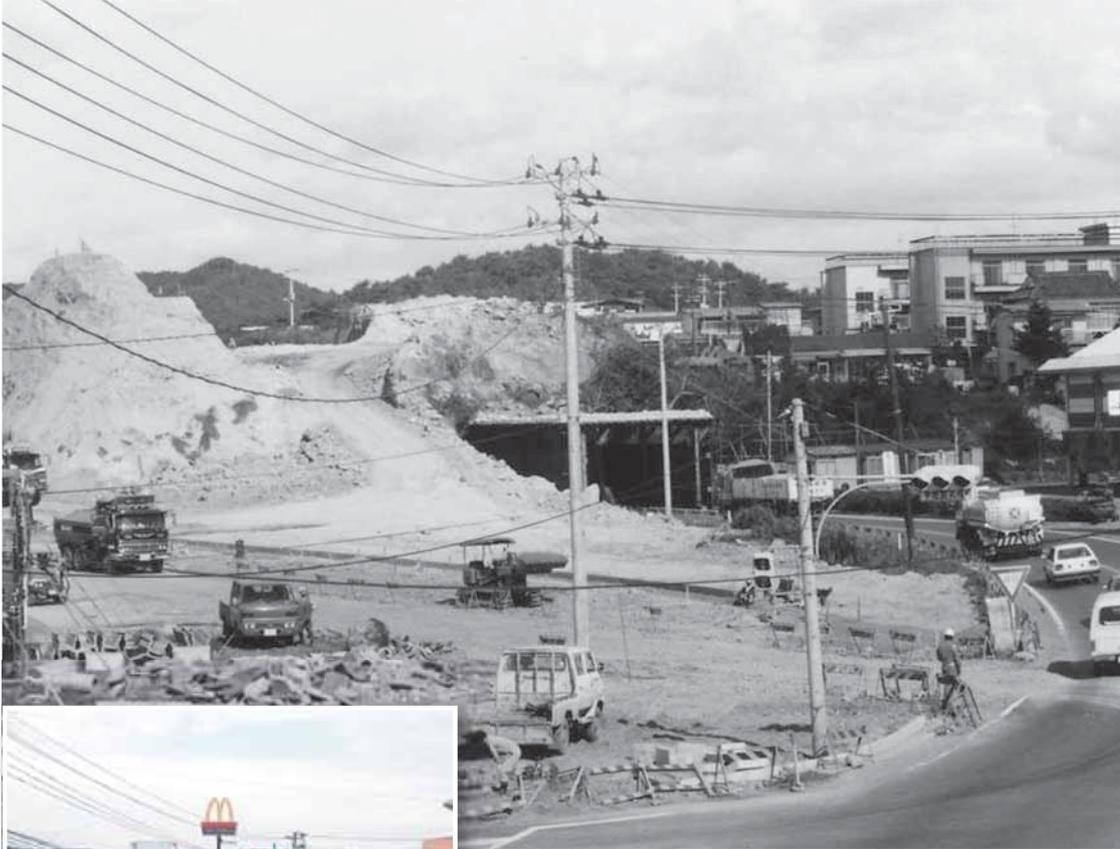


塩竈の歩み



▲昭和50年ごろの杉の入周辺(国道45号線)
◀現在

眺望に優れた魅力のある 住宅団地が次々と誕生

市制施行前年の昭和15年、本市の人口は、国勢調査によると3万5890人で、国勢調査が始まった大正9年から20年間で約2・7倍にも増加していました。以降も、狭い市域にも関わらず、中心市街地の過密化が進行し、新たな住宅地の開発が大きな課題となりました。

このため、昭和20年代後半から東玉川で、昭和30年代後半から北浜で土地区画整理が行われました。昭和40年代には西部丘陵地で新玉川や大日向などに団地が開発され、新浜町をはじめとする市営住宅の建設も相次いで進められました。

昭和50年代以降は、楓町(藤倉邸宅地)や松陽台、青葉ヶ丘などの眺望に優れた住宅団地が次々と誕生し、市外からの人口流入が進みました。

人口増加と市街地拡大に伴い、小学校の数も増えていきます。昭和32年当時、市内の小学校数は浦戸地区2校を含めて5校でしたが、第一小学校の在籍児童は約2800人で、県内有数の規模でした。そうした中、昭和32年、月見ヶ丘に建設していた一棟を暫定的に第一小学校の分校とし、付近の児童が通学を始めました。翌年には全面的に校舎が完成し、月見ヶ丘小学校が独立開校しました。

昭和40年以降、新興住宅地への小学校設置の要望が高まり、昭和52年に杉の入小学校と玉川小学校が開校し、小学校数は8校になりました。

市長コラム

雲外蒼天

「人生は、山あり谷あり。」
と言うけれど…私自身、53年の人生を振り返っても、まあ色々ありました。(笑)

―雲外蒼天

この言葉にたどり着いたのは、昨年、新型コロナウイルス感染症対策で、県外の学生さんに、支援パックを送ろうと決めたとさです。ありきたりの文章では、おもしろくないと探し当てた熟語です。

「困難や障害の先には、明るい未来がある。―暗い雲の向こうに広がる青い空―」

まさに、先が見えないコロナ禍での厳しい状況を表しながらも、夢や希望を失わずに努力し続けてほしいと願った言葉です。

コロナに負けない！
その想いを強く…！



塩竈市長 依藤 光樹